

## <質疑概要>

### 岸佑先生

「日本的なるもの」を考える上で、岸田を取り上げるのは適切であったのか。当時、日本では国宝の選定や海外博覧会への参加等により、「日本的なもの」を考える気運があった。それは日本建築史の通史を取り扱う書籍の出版が1925年～30年に集中していることも、背景となる出来事であろう。

岸田は「日本的なもの」の議論に大きな影響を与えたブルーノ・タウトとの交友関係があったとされる。このような大きな思想を捉える上では、一人の建築家の意見を見るだけでは、物事の一側面しかとらえることが出来ない。それは時代区分にも言えて、戦間期についてだけ論じるのではなく、貫戦期という範囲で岸田の業績を捉えることで、より明確に理解できるのではないか。

### 勝原基貴先生

当時、機械美や技術美が注目される中で、岸田はなぜオットー・ワーグナーの研究を進めていったのだろう。それは岸田の思想が明確であったのか、また、それがどこに向かっていったか（機械美／造形美）を把握する上で重要な問題である。

一方、岸田は海外調査中に多くの橋のスケッチをしていたという。海外の建築に触れた後で、岸田は Artistic Design と Mechanical Design の密接な関係の必要性を授業の中で述べているが、オットー・ワーグナーが設計した建築や橋の中にその答えを見出していたのかもしれない。さらに、分離派メンバーと前川、丹下らの狭間の世代である岸田が与えた影響、逆に他の世代から受けた影響を知ることが、岸田の更なる理解につながるだろう。

2014/11/21

文責：木村智（田路研）